

それらのコンテキストから切り離されて、〈verba prout sonant〉という制約の下に、異端的として断罪されているのであり、しかもエックハルトの本来の意図とは異なる解釈の立場から、断罪されているのである。本書に載録されている諸論文は、これらの点を疑問の余地のない仕方でも明らかにしていると言えるであろう。

K・リーゼンフーバー，山本耕平，谷隆一郎，荒井洋一編

『中世における知と超越——思索の原点をたずねて

(稲垣良典教授の退官を記念して)』

創文社，1992年，vi+326+8頁。

加藤信朗

本書は稲垣良典教授の九州大学退官を記念して刊行された、稲垣氏をはじめとし、稲垣氏と親しい交わりをもつ諸氏による論文集である。アタナシオス、ニュッサのグレゴリオスなどの初期教父からエックハルト、オッカムなどの中世末期に至るまでの広汎な神学・哲学の問題領域にわたり、今日におけるわが国におけるこの方面の研究を代表する研究者の論稿を集めている。稲垣氏が半生を捧げてこられた研究の深さと広さを思っ、あらためて感嘆と尊敬の念を厚くすると共に、戦後40年を経た我が国の研究の深化と発展を目の当たりにして、欣快にたえない。

泉治典「アタナシオスにおける受肉と救済」、谷隆一郎「エベクタシスとエクレスィア—ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』を中心として—」、中川純男「内在としての存在—アウグスティヌス『ソリロキア』、『魂の不死』における—」、荒井洋一「アウグスティヌスにおける「呼ぶ・呼びかける・呼び求める」、松田禎二「ボエティウスにおける運命と摂理—De consolatione Philosophiae を中心に—」、稲垣良典「経験と神」、山本耕平「トマスにおける人間の意志の自由と必然」、花井一典「超越概念と経験—トマスの場合—」、K・リーゼンフーバー「トマス・アクィナスにおける超越論的規定の展開」、宮本久雄「エックハルトのドイツ語説教の意義」、中山善樹「エックハルト『創世記注解』における「存在」の問題」、大森正樹「グレゴリオス・パラマスと哲学—ヘンカスムの伝統との関連において—」、清水哲郎「オッカムにおける方法としての論理学」の諸論稿が収められている。

それぞれの論稿にそれぞれの仕方であらうが、本書を貫いている同じ一つの筋であり、かつ、筆者の関心を強く惹きつけるものを若干の論稿に関連して述べさせて頂くことにより、責めをふさぎたい。

「経験が経験を越えるものをもつ」ということはある意味ではすでに矛盾であろう。しかし、経験において、カントの定式では「経験の制約を越えるもの」に出会っているということ、古来の伝統定式では、時間において「時間を越えるもの」、「永遠」に出会っているということが人間存在の根本所与、あるいは、そもそも存在ということの根本所与であり、神秘的なだろう。そして、このことが主題化され、意識されたのは、おそらく、ヨーロッパ中世のことなのだ。そして、このことが「形而上学」の成立であるとすれば、「形而上学」はその故郷をヨーロッパ中世に持っていることになる。

稲垣の思索の歩みは経験への沈潜によって貫かれていた。「経験と神」という、度胆を抜かれるように大胆な主題設定も稲垣のこの歩みの今到達した地点を示している。ここでわたしたちは、「五つの道」として知られるトマスの神の存在論証を支えているいわば *Potenz* として、神そのものの自体の認識を求めるトマス自身における神への内的な関わりの方へと導き入れられる。

超越論の規定に関わるリーゼンフーバーの論稿はこの経験を構成する超越の問題への透徹した視界と分析を与える。それは身のひき締まるドイツ的思弁の論理的構築により貫かれている。実際、著者はそこでトマスとヘーゲルの離接に言及しているのである。アリストテレスが未完成の『形而上学』の草稿で或る程度まで思弁を進めながら、体系的展開を与えぬまま終った、超越の規定の体系的網羅的な秩序づけが与えられたのは、中世キリスト教神学を基盤としてであったことが指摘される。しかし、トマスは、これを当時行なわれえたとように神学に直結して、たとえば、存在、真、善を父、子、聖霊に配するようなことをせず、人間の自然本性的認識に与えられ、これを構成する第一のものとして超越の規定を把握し、「存在するもの」、「もの」、「一」、「あるもの」、「真」、「善」などの諸規定相互の連関を秩序づけた。これこそまさに「形而上学」の成立と言えるであろう。それは経験に与えられている第一のものである超越の規定を経験の全体相を構成し秩序立てる原理として解釈することだから。「〈存在するもの〉という単一の実在性 (*natura*) が、複数の異なった理解内容へと分節されながら、この根源的分割 (*Ur-teilung*) における複数の意味内容が形而上学的判断 (*Urteil*)

により統一される」とされる論理的連関をめぐるトマス思弁の、著者による解釈は透徹して見事である。著者のドイツ語原文を明快な日本語に移された訳者にも感謝したい。ただ、一点、いつも気に掛かる筆者の疑念を述べさせてもらえば、“esse”、“Sein”という語の広がり、ないし、力を「存在」という語はどこまで写しうるのだろうか。一切のものの基底、Horizont の意義を「存在」という語は担いうるのだろうか。

しかし、同時に、筆者の関心をそそるのは、ヨーロッパ形而上学の基底そのものへの間である。そして、この渴望をも、本書は多方面から満たしてくれる。エックハルトのドイツ語説教とラテン語著作の間の内的関連を追及した宮本の論稿はこの点で注目される。それは実存の空間において、個から個へと語り出される説教としての言語の働きが、エックハルトにおいて、トミズムの伝統的形而上学を支えられながら、なおかつその枠組を越え出て、どのように新しい、創造の言語を作りえているかを解き明かしたものとして見事である。著者は「ドイツ語説教五b」を取り上げ、聖句から始められるこの説教の構造を重綴されるAからF、A'からF'という同一構造を持つ二部分から成るものとして捉え、この第一部から第二部へと深化されてゆく説教の言葉がラテン語著作に見られる存在論の新しい組み替えによってどのように構造化されているかを見て行こうとする。トミズムの存在論の新しい組み替えと著者が見るものは、創造主—被造物という二項のいわば対象的な二元的定立の廃棄と、比例の類比から帰属の類比への組み替えである。これにより、神と人の関わり直接性が生きられるべきものとして言語化されることになる。それは「わたしの無とわたしを摂取する絶対他者の一性」との関わり現成として言語化されるものであり、そこに、もはや養子としてではなく、「御子と同じ子になること」、すなわち、まさに「わたしが神の子として誕生する」ことが語られることになる。それは、おそらく、形而上学を支える、あるいは、むしろ形而上学を突き破るキリスト教信仰の現実の言語化であろう。

このキリスト教信仰に本来内含されている動性を、泉の論稿は正統信仰の起点アタナシオスの内に捉える。泉はこれをアタナシオスにおける神学の即事性と集中性と呼ぶ。それは三位一体論から切り離されることなく受肉論が立てられ、そしてまさにそこで救済が説かれるということである。すなわち、救済は創造の完成であり、創造の完成は救済の完成としてだけ理解され、そのことがロゴスの受肉において了解されるのである。泉は、さらに、このアタナシオスの受肉論・救済論の“Sitz im Leben”は sacramentalな教会であるとし、「テオポイエシス（神化）を被造性の消滅と神性へ

の合一と解すべきではなく、創造の目的の認識と賛美としてのメタポイエーシスと解すべきである」という言葉でその論稿を結んでいる。経験の内化としてのヨーロッパ中世における形而上学の成立は確かにキリスト教の成立に動機づけられていたのではなかろうか。

今ここで教えられることの多い他のすべての論稿に言及する余裕を持たない。すべての論稿は同じこの内在における超越という問題にそれぞれの仕方に関わっていると言えるであろう。中川のアウグスティヌス論稿がこの内在における超越という問題への鋭い切り口を示し、ギリシア的思考がどこでこの変容を遂げているかを的確に抉りだしているのです。この点に触れてこの論評を終えたい。中川はアウグスティヌスの初期著作『ソリロキア』と『魂の不死』を取り上げ、「学知がつねに存在するものであるならば、学知がそこにおいてある魂もまた常に存在するものでなければならない」という論証の成立の構造を問う。ここでの「……においてある」という言い方はアリストテレスの付帯的存在について言われる「基体においてある」という言い方に追随するものである。しかし、アウグスティヌスにおいて、それはアリストテレスの意味での実体存在—付帯存在の限定から離れると中川は解する。「においてある」とは、ここで「存在するとは或る場所においてある」ということを言い表わすものだと言われる。それゆえ、この理解は、もしも非物体的なもの（たとえば学知、真理など）があるなら、この非物体的なものがそこにおいてある、或る非物体的なものそのもの自体としての存在、すなわち実体としての存在を認めざるを得ないという帰結を導くのだとされる。したがって、もしも、学知がつねにあるものなら、学知がそこにおいてあるもの、つまり、魂もまたつねにあることが明証的なのである。これは霊の存在の自存性の場所を開くものであろう。「内在」とはそのような霊における存在のことである。内在における超越とは物体存在のうちにこれを構造化するものとして超越的なものが存するというのではない。霊という内在において、霊の内在を構造化するものとして超越との関わりが与えられているということである。

---